

ヒメゴウナ *Monotygma eximia* (Lischke)

## 【選定理由】

本種は、房総半島・男鹿半島～九州の内湾湾口部～外洋にかけての、細砂底低潮帯から潮下帯に分布し、新鮮な死殻の採集例は少なくないが、生貝の採集例は稀である（福田・木村, 2012）。県下では三河湾湾口部、伊勢湾（知多半島南部沖）などで死後間もない死殻が採集されているが、生貝が採集されたことはない。また、2000年頃の知多半島内海沖の水深3-10 mの砂底からは、比較的多くの死後間もない死殻が採集されたが、近年は死殻さえ全く採集されない。生息水深帯がやや深いのでモニタリングは難しいが、生貝が全く採集されないという危機的な生息状況より、絶滅の危険性が非常に高い種と評価された。

## 【形態】

本種は殻長20 mmの細長い円錐形で、殻全体に幅広く低い螺肋を巡らす。殻は光沢が強く、濃褐色から白色に近いものまで殻色には変異がある。殻質は比較的厚い。殻軸には弱い襞が1本ある。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

死殻は1970年代に金城埠頭沖のサンドポンプにより採集されたり（河合, 2010）、知多半島沖（伊勢湾）、日間賀島沖（三河湾湾口部）の潮下帯から水深10 mの砂泥底よりドレッジで少ないながら採集されている。しかし、生貝は少なくとも1980年以降採集されたことがない。また、生貝であると確実に認識できる標本（蓋の残された標本や液漬標本）も見つかっていない。

## 【世界および国内の分布】

房総半島・男鹿半島から九州の潮間帯から水深60 mに分布する（堀, 2017）。近年国内で生貝が採集されたという報告例はない。

## 【生息地の環境／生態的特性】

伊勢湾、三河湾では本種が潮間帯に生息するという記録はない。本種の生息環境についての情報はほとんどなく、本種の生息を裏付ける死後間もない死殻が採集された2000年の知多半島内海沖の生息環境について記述する。

当時は中部国際空港造成のための埋め立てが行われる前で、反時計回りで伊良湖水道から外洋水が伊勢湾内を環流しているが、その影響を受け、潮通しがよく水深10 mまでは底質に硫化水素の発生がなく、透水性の高い有機質の少ない砂底で、ナメクジウオ（原索動物）が普通に生息していた（木村, 2000；木村, 2009）。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域にはほとんど存在しないことが減少の要因と考えられる。

## 【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

## 【特記事項】

2004年前後に蒲郡市三谷町地先の人工干潟で死殻が一時的に確認されたことがあるが、これは、その場所に生息していたわけではなく、三河湾湾口部（中山水道）より運ばれた浚渫土砂に含まれていたものと判断された（木村, 2004）。

## 【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. ヒメゴウナ, p.87. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

河合秀高, 2010. 名古屋のサンドポンプで得られた貝類 (その2). かきつばた, (36): 28-30.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18-20.

木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14-20.

木村昭一, 2009. ナメクジウオ. in: 愛知県環境部 (編), 2009. レッドデータブックあいち 2009, 621p. 愛知県.

堀 成夫, 2017. ヒメゴウナ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 467, 1123. 東海大学出版部, 平塚.

(木村昭一)



南知多町内海沖(ドレッジ水深2-5 m), 2000年7月28日, 木村昭一採集